

「内なる国際化」を学ぶシムポジウム 明治学 院大学

共生社会の担い手の育成が目的

ボランティア実践指導等報告

明治学院大学（東京都港区）は昨年12月10日、白金キャンパスで、「内なる国際化」を振り返るシンポジウム「大学で内なる国際化」を学ぶ」ということを開催した。「内なる国際化」プロジェクトは、海外にルーツを持つ人々が増加している状況で、同大学は「内なる国際化」の現状に対応できる共生社会の担い

手の育成を目的に、2015年度から「内なる国際化プロジェクト」に取り組んでいる。所定の科目の学びを修めた学生を「多文化共生サポーター」として認証し、さらに支援実践参加の学びを修めた学生を「多文化共生ファシリテーター」として認証している。2017年度から2021年度まで、「多文化共生ファシリテーター」には累計45人の学生が認

証され、卒業生は社会に学びの成果を還元している。当日は、同プロジェクトを振り返り、「ボランティア実践指導」担当者として報告や、鼎談などが行われた。

開会に当たり、永野茂洋・同大学副学長は、あいさつの中でプロジェクトの特色はマニュアルがないこと、学長プロジェクトとして立ち上げたことを紹介、「現場で人の話を聞いて、気付かされて、持ち帰るというプロジェクトの繰り返しが先人の経験が大きい」と述べた。

「内なる国際化」プロジェクトは、海外にルーツを持つ人々が増加している状況で、同大学は「内なる国際化」の現状に対応できる共生社会の担い手の育成を目的に、2015年度から「内なる国際化プロジェクト」に取り組んでいる。所定の科目の学びを修めた学生を「多文化共生サポーター」として認証し、さらに支援実践参加の学びを修めた学生を「多文化共生ファシリテーター」として認証している。2021年度まで、「多文化共生ファシリテーター」には累計45人の学生が認

証され、卒業生は社会に学びの成果を還元している。当日は、同プロジェクトを振り返り、「ボランティア実践指導」担当者として報告や、鼎談などが行われた。

開会に当たり、永野茂洋・同大学副学長は、あいさつの中でプロジェクトの特色はマニュアルがないこと、学長プロジェクトとして立ち上げたことを紹介、「現場で人の話を聞いて、気付かされて、持ち帰るというプロジェクトの繰り返しが先人の経験が大きい」と述べた。

閉会の辞では村田玲音・同大学長が同プロジェクトについて期待することとして、教学的側面として大学の授業を広げていくこと、大学外の集団での活動（ボランティア活動など）を充実させていくことを挙げた。



村田学長

文化共生ファシリテーター」には累計45人の学生が認



プロジェクトの現状等報告

続いて、同プロジェクトのこれまでとこれからについて、社会学部教授の野沢慎司氏と坂口緑氏が、同プロジェクトの目的、認証対象学生の現状、今後の課題等を報告し

た。この中で、社会福祉法人さほうと21との協働について、夏休みと春休みに難民の子どもたちを白金キャンパスに招いて学習支援教室を開催したことを報告した。「ボランティア実践指導」では、大学生と担当講師の萩村哲朗氏が報告。学生は夏休みを利用しての経験と発見を発表した中で、「難民の子どもたちは文化・言葉の違いなどで学校でうまくコミュニケーションが取れない」「外国人にとって異国で生活することはどれだけ大変かが分かった」「文化の違いを受け入れ相手の立場を考えることが大事だと思う」など感想が聞かれた。

鼎談は、高橋誠一氏（法政大学他専任講師、川崎市外国人市民施策専門調査員）、山岸素子氏（NPO法人移住者と連携する全国ネットワーク事務局 長、カラカサンく移住女性のためのエンパワメントセンター 兼任講師）、長谷部美佳（明治学院大学教養教育センター准教授（進行））によって行われた。高橋氏と山岸氏はそれぞれ「内なる国際化論」の授業等について報告した。高橋氏は授業で伝えたいこととして、「3歩先を目指す」こととした。山岸氏は授業を通して、多文化共生社会、多文化共生社会に必要な法制度のあり方、現場でできることなどについて述べた。



高橋氏、山岸氏、長谷部氏による鼎談

調査員）、山岸素子氏（NPO法人移住者と連携する全国ネットワーク事務局 長、カラカサンく移住女性のためのエンパワメントセンター 兼任講師）、長谷部美佳（明治学院大学教養教育センター准教授（進行））によって行われた。高橋氏と山岸氏はそれぞれ「内なる国際化論」の授業等について報告した。高橋氏は授業で伝えたいこととして、「3歩先を目指す」こととした。山岸氏は授業を通して、多文化共生社会、多文化共生社会に必要な法制度のあり方、現場でできることなどについて述べた。